

子どもの困り感に寄り添う

校長 山田浩之

文部科学省の資料によると全国平均で、三五人の学級の中に、特異な才能のある子どもが0.8人、発達障害の可能性のある子どもが3.6人、家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子どもが11.5人、日本語を家であまり話さない子どもが1.0人、不登校傾向の子どもが4.1人、不登校の子どもが0.6人いるそうです。

新潟小学校の実態は、全国平均とは当然ながら違ってきますが、子どもが多様であることは、同じです。

例えば、次のような子どもがいるかもしれません。先生の説明や友達の話を一息懸命に聞いても、算数の問題を理解できないということが、あるかもしれないかもしれません。そんな時、「問題の意味が分かりません」と言える子どももいますが、恥ずかしくて言えない子どももいます。それが何度もとなると、ますます言いにくくなります。さらには、問題を理解できていないということに気付いていないこともあるかもしれません。そんな子どもは、どうしたらいいか分からず、困ったままになってしまいます。

また、例えば、集合して整理するなど、集団で同じように行動する場面や先生のお手本と同じように体を動かす場面で、みんなと一緒に動くことが

できないということがあるかもしれません。先生の口頭による指示だけでは、何をすればいいのか分からないということが、原因かもしれない。また、目で見て同じ動きをする、いわゆる模倣が苦手なこともあります。何のためにそうするのかの見通しがもてないと動けないこともあるかもしれません。

新潟小学校では、可能な限り、多様な子ども一人一人が抱える困難や感じている困り感に寄り添いたいと考えています。しかしながら、限りあるマンパワーでは、多様な子どもたちに寄り添いきれないこともあります。どうしたらいいか、もつとできることがないか、いつも考えています。

新潟小学校では、一年生に対して、子どもたちがつまづきやすい、国語の特殊な表記などについて、取り立てて指導するMIMを昨年度から取り入れていきます。例えば、促音の「っ」や長音などについて動作を取り入れることで、目に見えない音の特徴を具現化し、理解しやすくします。合わせて担任以外の指導者も入ること、子どもの困り感をより丁寧に見ていくこともねらっています。六月十七日からMIMをスタートしました。